6．人　間　観

6－1　人間の分類

6－1－1．年齢による人間の分類

生まれたばかりの赤ん坊（男も女も）をティネシ　teynesi　という。ティネシは汚いもののことで、赤ん坊のことが大事だから、悪魔除に言うことだ。ティネシとは、くそのことだから、そこに悪魔が来ていても、赤ん坊にいたずらしない、と父に教わった。また、赤ん坊をシーオンタク　siontak　ともいう。おなかにくそが入っているからそういう。これも悪魔除の言葉だと教えられた。シーオンタクは、くそが入っているということだから、きたないから悪魔も手が触れられない。

〔白沢ナベ氏〕

一年くらいは、ティネシと呼ぶ(小田イト氏)。満一才すぎても、歩き始めるまではティネシという。それを過ぎると名前を呼ぶようになる。

〔白沢ナベ氏〕

コッ　ティネシ　kot teynesi　とか、コル　シオンタク　kor siontak　は、「自分のあかちゃん」のこと。クコッ　ティネシ　ku=kot teynesi　は、「私のあかちゃん」のこと。

〔小田イト氏〕

（生まれたばかりの赤ん坊の性別を区別するときは）男の子ならヘカチ　hekaci、女ならマッカチ　matkaci　という。

〔小田イト氏〕

小さい子どもはヘカチ　hekaci、マッカチ　matkaci　という。小学校5、6年生でもそういう。

〔小田イト氏〕

ヘカチ　hekaci　は5、6才から12、3才までをいう。男の子だけ。女の子はマッカチ　matkaci　という。それ以上は名前で呼ぶ。

〔白沢ナベ氏〕

中学生くらいになったら、15、6才になれば、タネ　オクカィポ　ネ　アン　tane okkaypo ne an「もう青年になった」という。女の子は、タネ　メノコポ　ネ　アン　tane menokopo ne an「もう少女になった」という（白沢ナベ氏)。オクカィポとかメノコポは、成人前くらいの人までいう。

〔小田イト氏〕

「若い人」のことをペゥレクル　pewre kur　と言う。私は、若い頃は名前で呼ばれた。もう

シサム　イタク　sisam itak「日本語」ばかりになっていたから。年のいった（年寄りの）人はク　サポ　フナクン　エアルパ　ku=sapo hunak un e=arpa「私の姉さん、どこへ行くの」などと呼びかけた。自分はそのように呼びかけられたことはない。私の母も日本語を多くつかった。日本語が分からないと子どもがこまると思うから使うのだろう。

〔白沢ナベ氏〕

オクカヨ　シリポ　ウウォシマレ　okkayo sirpo uwosmare「大人の男になった」（白沢ナベ氏）。メノコ　シリポ　ウウォシマレ　menoko sirpo uwosmare「大人の女になった」。これくらいになると結婚する。私は21才で結婚した。

〔小田イト氏〕

メノコポ　menokopo　は「ちょうど年頃の女の人」という意味だ。

〔小田イト氏〕

オクカィポ　okkaypo　はオクカヨ　okkayo　より２つ３つ若い、という感じ。「あんこ」にあたる。オクカヨは30位の人から使える。35位の人はオクカイポとはもう言えない。

〔白沢ナベ氏〕

ウナルペとアチャポ。タアン　ウナルペ　フナクン　ウナルペ　アン　taan unarpe hunak un unarpe an「このおばさん、どこのおばさんだ」（小田イト氏）。ウクルィメムン　ウナルペ　クネ　ワ　ukuruymem un unarpe ku=ne wa.「私はウクルィメムのおばばだよ」（白沢ナベ氏）。フナクン　ウナルペ　エネ hunak un unarpe e=ne？「あんたどこのおばさんだ」（白沢ナベ氏）。カニ　アナク　ランコシ　ウン　ウナルペ　k=ani anak rankosi un unarpe　です「私はランコシのおばばだ」。（小山田直美氏をさして）60才すぎたら　エカシ　ekasi　だ。（切替（36才）をさして）キリカエ・アチャポ　kirikae acapo　と言える。

〔小田イト氏〕

「年寄り」はオンネクル　onne kur　と言う。昔は50くらいになればオンネクルだ。男の年寄りは、ポロ　スクプ　クル　poro sukup kur　という。女はポロ　スクプ　マッ　poro sukup mat　という。40くらいの男の人が遠くにいれば、トアニウン　クル　toani un kur　とか、トアニウン　オクカヨ　toani un okkayo　などという。

〔白沢ナベ氏〕

６－１－２．技能による人間の分類

イソンクル　isonkur　は、精神が良くてクマを与えられるような人のこと。「ウラユシナィの人の話」（11－１参照）に出て来るような人のことだ。（誰もがクマを捕るわけではなく）クマを捕れない人もいるらしい。精神が悪くて、いいかげんに金儲けばかりしようとする人は神様が見てくれないのだろう。

イソンクル　isonkur　は代々続くものだ。イソンクル　サニ　isonkur sani　はそういう人の系統のこと。「ウラユシナィの昔話」（11－１参照）のニシパの息子や娘は、イソンクル　サニとか　ニシパ　サニ　nispa sani　とか言われるだろう。

〔白沢ナベ氏〕

イソンクル　サニは、クマでもなんでもとれる人の息子とか孫とかのこと。反対にウェンクル　サニ　wenkur sani　は、貧乏人のこと。

〔小田イト氏〕

ニシパの奥さんはカッケマッ　katkemat　という。カッケマッ　サニ　katkemat sani「裕福な婦人の子孫」という言葉もあるだろう。サニとかタィペヘ　taypeheという言葉は「そのまき（その血筋）」ということ。カッケマッ　タィペヘ　katkemat taypehe、イソンクルタイペヘ　isonkur taypehe　と言える（こう言えるか、という問いを肯定された）。わしはウェン　カッケマッ　wen katkemat「貧乏な奥さん」だ。

〔白沢ナベ氏〕

炉の火に常に当たっていたら背中や膝に火形（アペケシケ　apekeske）が皮膚にしみつく。背中に火形がつくのは背中あぶりしたからだといわれた。膝に火形がつくのは、トランネ　toranne（怠け者）の証拠といわれた。

〔小山田直美氏〕

男女の分業

夫は、エキムネ　ekimne（猟）をして、妻は畑を耕すというのが昔の生活だ。

〔小田イト氏〕

酒作りは男の仕事だ。クル　kur　というから男だ。酒をこす人、糀で酒をしこむ人、サッチェプ　sat cep　を煮る人も男。普段、魚を煮るのは女だが、大鍋で煮るのは力がいるから男がやるのではないか。

〔白沢ナベ氏〕

カムィノミ　kamuynomi　は、女がしては、いけなかった。今は、じいさんがなくなって、女でもイチャルパ　icarpa（先祖供養）の時に、先祖に物を言ったりするが、昔は女がそんなことをしたら、悪いメノコだといって、ホイヨ　メノコ　hoiyo menoko　と言われた。昔は女のいるところでエサル　カムィノミ　esar kamuynomi（声を出して祈る）するものではないと言われていた（小田喜代作氏）。

〔小田イト氏〕

6－1－4．親族用語

千歳では、父母の呼び方が人によって違った。ある人は、ハポ　hapo（母）、アチャポ　acapo（父）というし、白沢氏のようにトット　totto（母）、ハポ　hapo（父）という人もいる。自分は、母は　トット　tottoだが、父は小さいとき死んだので、呼び方は知らない。日高の人で、ハポ　hapo（母）、アヤポ　ayapo（父）といっているのを聞いた。

〔小田イト氏〕

ク　ユポ　ku=yupo（私の兄）、ク　サポ　ku=sapo（私の姉）、とよその人のことを呼ぶことがあった。

〔白沢ナベ氏〕

7つか8つのころ、もう、甥っこ、姪っこがいたから、私の体が小さいので、からかわれて、「ずいぶん大きいウナルペ　unarpe　だな」と言われたことがある。

〔白沢ナベ氏〕

カルクフ　karkuhu(甥)、マッカルクフ　matkarkuhu(姪)（小田イト氏)。ク　マッカルク ku=matkarku（私の姪)。

〔白沢ナベ氏〕

おじいさんは　エカシ　ekasi、おばあさんは　フチ　húci。孫がいればエカシだ。私はひまごができたから、マクタフチ　makta huci「孫ばあさん」だ。

〔白沢ナベ氏〕

マクタ　エカシ　makta ekasi「ひいじいさん」、ナ　マクタ　エカシ　na makta ekasi「ひいひいじいさん」。

〔小田イト氏〕

アチャポ　acapo　は何才でもいいんだ。生まれた子どもがおじさんのことをアチャポと呼ぶわけだから。

〔白沢ナベ氏〕

クミッポ　ku=mitpo「孫」。

〔白沢ナベ氏〕

イルワク　irwak「いとこ」（小田イト氏)。「またいとこ」をマクタ　イルワク　makta irwak とかウサタ　イルワク　usata irwak　ということがある。マクタ　イルワク　makta irwak　は2回目、ナ　マクタ　イルワク　na makta irwak　は3回目になるらしい。

〔白沢ナベ氏〕

6－2．身体部位名称

頭部

髪の毛　オトピ　otopi。コトピ　k=otopi「私の髪の毛」。

白髪　レタルペ　retarpe。

頭　サパ　sapa。クサパ　ku=sapa「私の頭」、エサパ　e=sapa「おまえの頭」。

額　ノィポロ　noyporo。クノィポロ　ku=noyporo「私の額」、エノィポロ　e=noyporo「おまえの額」

前頭骨　ウプシ　upsi、ウプシヒ　upsihi；エテンテンケ　etentenke、エテンテンケヘ　etentenkehe。ケテンテンケヘ　k=etentenkehe「私の前頭骨」、エエテンテンケヘ　e=etentenkehe「おまえの前頭骨」。

鼻　エトゥフ　etuhu。

鼻の穴　エトゥプイェ　etupuye。ケトゥプイェ　k=etupuye「私の鼻の穴」。

鼻水を垂れる　エトゥペチクカ　etupecikka。

耳　キサラ　kisara。クキサラ　ku=kisara「私の耳」。

耳の穴　キサラプイェ　kisarpuye。

みみたぶ　キサンラプ　kisanrapu　<　kisar rapu(キサットペ　kisattope　<　kisar tope〔小田イト氏〕)

みみくそ　(知らない)

眉毛　ラルフ　raruhu。クラル　ku=raru、クラルフ　ku=raruhu「私の眉毛」、エラル　e=raru、エラルフ　e=raruhu「おまえの眉毛」。

目　シキヒ　sikihi。クシキヒ　ku=sikihi「私の目」。

まつげ　シクラプ　sikrapu。

まぶた　シクカシケ　sikkaske。

目玉　シクヌミ　siknumi。

白目　レタルシクヌミ　retar siknumi。

黒目　クンネシクヌミ　kunne siknumi。

めやに　インテ　inte (小田イト氏)

涙 (泣くとき)　チシヌペ　cisnupe (小田イト氏)。ヌペ　nupe (泣くときも、目にゴミが入った時も)。

こめかみ　(忘れた)

頬　ノタカム　notakam、ノタカミ　notakami。

口 (私の)　クパロ　ku=paro

唇　パトイェ　patoye。パトィ　patoy(小田イト氏)。エパトイェ　e=patoye「おまえの唇」。

上唇　カンナパトイェ　kanna patoye。

下唇　ポクナパトイェ　pokna patoye。

歯　イマキ　imaki。クイマキ　ku=imaki「私の歯」、エイマキ　e=imaki「おまえの歯」。クイマキ　アルカ　ku=imaki arka「私の歯が痛い」。

奥歯　イクィニマク　ikuynimak。

前歯　サンケニマク　sankenimak (サンケ　sanke は、「見えていること」)。

糸きり歯　(知らない)

舌　パルンペ　parunpe。

唾　(忘れた)

唾を吐く　トプセ　topse (小田イト氏)

髭　レキヒ　rekihi。エレキヒ　エメムケ　ワ　エエク　e=rekihi e=memke wa e=ek？「髭を剃ってきたかい」、レク　カ　クサク　ワ　クメムケ　カ　ソモキ、タント　アナクネ rek ka ku=sak wa ku=memke ka somo ki, tanto anakne「髭もないので、剃ることもない、今は」

レキヒ　レタルペ　ウシ　タネ　キ　rekihi retarpe us tane ki「髭に白髪が混じっている」、レキヒ　レタルペ　レタル　カネ　アン　rekihi retarpe retar kane an「髭の白髪が白くなっている」。

男が15、6才のオクカィポ　okkaypo　と呼ばれる年頃になると髭が生えかかってきて、タネ　レコマチ　カネ　アン　tane rekomaci kane an「もう髭が生えかかってきた」とか、タネ　レクシ　カネ　アン　tane rekus kane an　「もう髭が生えている」とか言う。結婚するまでにはすっかり伸びている。

髭の短い人は、レキヒ　ウェン　rekihi wen　「髭が悪い」と言われて笑われる。また、むしゃむしゃしたカールのかかった髭より、すらっとした髭の方がよい（小田イト氏）

顎

上顎　カンナノクケウェ　kannanokkewe

下顎　ポクナノクケウェ　poknanokkewe

顎先　ノッキリヒ　notkirihi（ノッケゥ　エアネヒ　notkew eanehi とか、ノッケウェ　エトゥプシケ　notkew etupuske　とも言う。ノッケゥ　notkew は顎全体のこと。〔小田イト氏〕）

喉ぶえ　セゥリ　sewri。レクチ　カヤィセ　rekuci kayayse「喉がかゆい」。

首　レクチ　rekuci。レクチヒ　rekucihi（小田イト氏）

ぼんのくぼ　オクケウェ　okkewe。

胴部

背骨　イクケゥポネ　ikkew pone。イクケゥ　ikkew は、腰のこと（小田イト氏）。

肩　タプスッ　tapsut。

肩の関節　タプスッポネウウェウシ　tapsutponeuweusi。

肩甲骨　タペレ　tapere。タペレポネ　tapere pone。

背中　セトゥル　seturu。

胸　ペンラム　penramu。

肺　ユクラミ　yukrami。

乳房　レラリ　rerari。クレラリ　アルカ　ku=rerari arka。

乳汁　トーペ　tópe。大人が子供に、または子供が、乳のことをトット　ハクカ　totto hakka という（トットは、「母」、ハクカ　hakka「水」の幼児語）。ト　ノンテ　to nonte「乳を飲ませる」（小田イト氏）。

心臓　サンペヘ　sanpehe。クサンペヘ　ku=sanpehe「私の心臓」、エサンペヘ　e=sanpehe「おまえの心臓」。

あばら骨　ウッニチ　utnici。

脇の下　ヤトゥ　yatu、ヤトゥポキ　yatupoki。

腹（おなか）　ホニヒ　honihi。クホニヒ　ku=honihi「私のおなか」、エホニヒ　e=honihi「

おまえのおなか」。

みぞおち　ニンケゥパロ　ninkewparo。ニンケゥ　ninkew　は、肝臓のことではないか。カムィ　ニンケゥ　kamuy ninkew「クマの肝臓」とかウムマ　ニンケゥ　umma ninkew「馬の肝臓」、プタ　ニンケゥ　puta ninkew「豚の肝臓」という。ニンケゥパロは、「肝臓の口」という意味だ。

内臓　カンカニ　kankani、オシケ　oske。カンカニ　エタィペ　ワ　エ　kankani etaype wa e「内臓を全部引っ張り出して食う」。

胃　ヨシペ　yospe。

肝臓　フィペ　huype（？）

太い腸　ルウェ　カンカン　ruwe kankan

細い腸　アーネ　カンカン　ánе kankan

ぼうこう　ピセ　pise

わき腹　カパラ　ホニ　kapar honi。

へそ　ハンク　hanku、ハンクフ　hankuhu。

へその緒　イレスアトゥ　iresuatu。ハンク　アトゥフ　hanku atuhu。「へその緒を切る」ことをエハチャ　ehaca　という（小田イト氏）。

腰　イクケウェ　ikkewe。クイクケウェ　アラカ　ku=ikkewe arka「腰が痛い」（小田イト氏）

足の付け根　キロウシケ　kirouske（小田イト氏）。

尾てい骨　オソロポネ　osorpone。

尻ぺた　オソロカミ　osorkami。

肛門　ヨルプィ　yorpuy、ヨルプイェ　yorpuye（小田イト氏）。クヨルプイェ　ku=yorpuye「私の肛門」。

大便（くそ）　シー　si。

男性器（私の）　クチイェヘ　ku=ciyehe。

こう丸（私の）　クノキヒ　ku=nokihi。

女性器　チピヒ　cipihi。エコルペ　e=kor pe「おまえの持ち物」。今だから性の話もできるが、昔は、千歳では、厳しかった（小田イト氏）。

脚部

足全体　ケマハ　kemaha。

足の上部　マクン　ニサピ　makun nisapi。

足の下部　サンケ　ニサピ　sanke nisapi。

すね　ウッチカム　utcikam。

もも　オミヒ　omihi。

ひざ　コクカサパ　kokkasapa。

くるぶし　トコンポネ　tokonpone。

かかと　ケスビ　kesupi。

足の指　ウレペチ　urepeci（小田イト氏）。

足の裏　ウレアサマ　ureasama。

足の甲　ウレカシケ　urekaske。（小田イト氏）。

土ふまず　ウレピソイェ　urepisoye（小田イト氏）。

つめ　アミヒ　amihi（小山田直美氏）。アミヒ　タンネ　amihi tanne「つめが長い」、アミヒ　イチャクケレ　amihi icakkere「つめが汚い」（小田イト氏）。

腕部

手全体　テク　tek。エテケ　プニ　e=teke puni「手をあげろ」。

上腕　マクン　アムニニ　makun amunini

下腕　サンケ　アムニニ　sanke amunini

肘　シットキ　sittoki。

手首　テクリチ　tekrici

掌　テクコトロ　tekkotoro

親指　ルイェアシケペチ　ruyeaskepeci

人差指　イタンキケム　アシケペチ　itankikem askepeci。「腕をなめる指」の意味だが、私自身は、指で皿をなめたことなどない。

中指　ノシキ　アシケペチ　noskiaskepeci

薬指　ポン　アシケペチ　トゥタヌ　アシケペチ　pon askepeci tutanu askepeci

小指　ポン　アシケペチ　pon askepeci。

その他

肉　カム　kam、カミヒ　kamihi

血　ケム　kem。オケムタナィネ　okemtanayne（意味不祥）ということばがある（小田イト氏）。

血管　ケムリチ　kemrici。

汗をかく　ポプペ　タ　アシン　poppe ta asin

垢　トゥル　tur、トゥルシ　turus「垢がつく」

〔白沢ナベ氏〕

6－3．人名

アィヌ　レヘ　aynu réhe「アイヌ語の名」を神様に言わないでカムィノミ　kamuynomi（神への祈り）はできない。

〔白沢ナベ氏〕

アトムテ　atomte　という名の百才すぎたじいさんが昔いた。

〔白沢ナベ氏〕

6－4．身体の世話

6－4－1．文身

女は口と手に入墨をする。入墨をした男は見たことがない。

姉は、14、5歳時に、口に入墨をした。男（オクカヨ　okkayo）か女（メノコ　menoko）かわからないから印をつけてやるからと言われて、入墨された。口にする入墨を　パロシヌイェ　paro sinuye、手にする入墨をテクシヌイェ　tek sinuye　という。千歳では、昔の年寄りは、額の間(両方の眉毛の間)にも入墨をした。このような入墨をした人はラルトゥルヌイェクル　rarutur nuye kur　とか　ラルトゥルヌイェマッ　rarutur nuye mat　という。

〔白沢ナベ氏〕

カマカで栃木のばあちゃん（栃木政吉さんの嫁の母）が手に入墨をしていて、肘の所までしていた。

〔小田イト氏〕

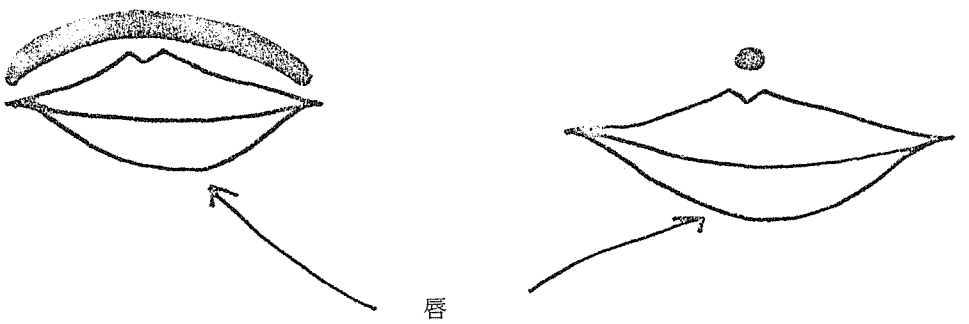
入墨の仕方。剃刀（カミシリ　kamisiri）で傷を付け、カシワ（トゥンニ　tunni）の皮を煮て、そのつゆをすり込む。そうすると黒く染まる。

入墨するときは、昔から剃刀を使っていたようだ。ユクチコィキプ　yukcikoykip　のルシ　rus（獣の毛皮のことか？）をウィマム　uymam（交易）に行って売り、剃刀を買って来たようだ。ただ、昔話でタシロ　tasiro　を研いで入墨したということを聞いたことがある。

入墨を途中でやめる人もいた。その人らは上唇に入墨させているだけである。

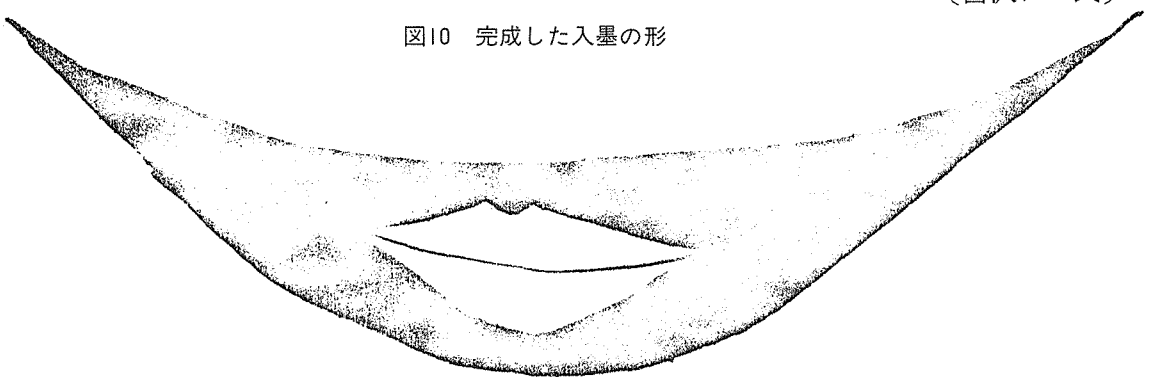
〔小田イト氏〕

図9　入墨を途中でやめた人の入墨の形



完成した入墨の両頬の先端をパーキサル　pákisar　と言う。　〔白沢ナベ氏〕

図10　完成した入墨の形



6－4－2．髪型

子どもが小さい時は、後だけ毛を長くし残りはそる。火に落ちそうになっても神様がつかんでたすけてくれるからだという。エネ　ネ　ハウェ　アシ　ene ne hawe as「そういう話だ」

〔小田イト氏〕

子供の髪は、もみあげ（エキプポ　ekippo)、てっぺん（カンキタィ　kankitay)、額のはえぎわ(モル　moru)、を残して剃る。そうしてのこしておけば、川におちて流されても神様がつかんで助けてくれる、と父が言っていた。エモルフ　e=móruhu、エエキプポホ　e=ékippoho。ヘカッタル　オピッタ　モル　ウシ　hekattar opitta moru us「こどもはみんなモルがあるよ」。

あかちゃんの頭のあかのことをサパトゥル　sapatur　という。頭の垢は、くしでしずかにとかしてとる。(頭の垢をおとすと、風をひくといって、身体は洗っても頭は洗わない人もいた〔小田イト氏〕)。

〔白沢ナベ氏〕

子どもの髪は、サパハ　オシマケ　ポンノ　ア　アヌ　sapaha osmake ponno a=anu　するだけだ(頭のうしろすこし残すだけ)。炉に落ちそうになったとき、神様に引っぱってもらうためだ。

〔小田イト氏〕

昔は6、7才まで男も女も頭をそった髪型をしている。それ以上は学校に行くから普通の髪型になる。男の子は坊主頭、女の子はおかっぱにする。

〔白沢ナベ氏〕

6－4－5．お守り・まじない

妹が夜泣きして止まらないとき、父母が起きて火をたいて、燃やした綿のススをナヅキ(額)や頬、鼻のてっぺんにつけて、悪魔よけをした。

カッキ　クス　ハウェ　ネ　ナン　コンナ、katki kusu (h) awe ne nan konna「何か悪魔が付いたから、おっかながって泣いているようだ。(赤ん坊は悪魔を見ることができる。)」、ワタ　wata　でも燃やして　ノィポロホ　ウシ　ノタカミ　ウシ　エトゥフ　ウシ　noyporoho usi notakami usi etuhu usi「額やほほや鼻につけろ」って言っていた。

カッキ　クス　ワ　チシ　ハウェ　ナンコル　katki kusu wa cis hawe nankor　「何かを教えるのに泣いているのかな」

悪魔よけのアイヌ語は、忘れてしまった（クコヤィラムペゥテク　ku=koyayrampewtek)。

ショーブ（スルク　クスリ　surku kusuri）を切って、まん中を紐で縛り、襟首に縫いつける。子どもが泣いて止まないときに、襟首につける。臭い草だから悪魔けになる。

〔白沢ナベ氏〕

私の妹は夜なきしてどうしようもない。子どもは悪魔を見て泣くことがあるから、といって、起きて、火をたいて、ぼろを燃やし、煙を外に出した(エソィネ　オスルパ　esoyne osurpa.。)（ネーノ　ソモ　クィタク　ヤクン　アエラムアン　ペ　ネ　ナ　néno somo ku=ytak yakun

a=eramu'an pe ne na「そう（アイヌ語で）言わなければ、理解できるのにね」)。ソユン　ミンタル　オルン　オスルパ　soyun mintar orun osurpa（外の庭の方へ）持って出て、燃やす。その燃えた炭につばをつけて、ひたいと鼻の先（エトゥモミ　etumomi）に指先でつける。ほほにもつける。そうすると悪魔がその顔を見て、おばけだと思って逃げると言う。スルク　クスリ　surku kusuri　に穴をあけてひもをつけて、体の弱い子どもの襟にぬいつけておく。

〔白沢ナベ氏〕

重い病気をした時など、鎌(イヨクペ　iyokpe)を戸口にお祈りをしながら刺す(エウシ　eus)。悪い病気をトゥエ　tue（切る）せ　オケウェ　okewe（切る）せという。

鎌は、シコポプ　sikopop（錆びた）ものが効き目がある。錆びた鎌で切られると切られたものは腐ってしまうと言われていた。

〔白沢ナベ氏〕

大鎌を持った和人が来るから（ポロ　イヨクペ　コル　シサム　ウタル　アルキ　poro iyokpe kor sisam utar arki）気をつけろと言われた。

〔小田イト氏〕

戸口に臭い匂いのする草(キキンニ　kikinni、スルク　クスリ　surku kusuri、プクサ　pukusa)をさした。

〔白沢ナベ氏〕

6－4－6．禁忌

イナゥ作りに関して。イナゥケ　inawke（イナゥ削り）する時、顔も手も洗って身を浄めるものだ。だから、垢も何もつかないきれいなイナウを作る。

トゥルサクノ　ネプ　ネ　ヤクカ　アカル　ペ　ネ　tursakno nep ne yakka a=kar pe ne「垢もつけずに、なんでも作るものだ」

イナウを削るときに身を清めずに作ると、神様が怒る（カムィ　イルシカ　kamuy iruska)。

トゥルコカル　イケ　スケ　turkokar ike suke　して　イペレ　ipere　すれば、いけない。「汚くして炊事して食べさせるのは良くない」

〔白沢ナベ氏〕

川に関して。川に泳ぎに行っても小便など川の中にしてはいけない。陸（おか）の上でも小便する場所に気を付ける。

エウォンネ　オクィマ　カ　アン　ネプ　カ　ウェン　ペ　アオスラ　カ　キ　コル　ワクカ　ウシ　カムィ　イルシカ　ワ　チェプ　カ　ヘメス　カ　ソモ　キプ　ネ　ナ　ewonne okuyma ka an nep ka wen pe a=osurpa ka ki kor wakka us kamuy iruska wa cep ka hemesu ka somo kip ne na

「水に小便しても、何でも悪いものを捨てると、水の神が怒って魚も上がって来なくなる」

洗濯する時、水を汲んで陸（おか）で洗う。川で洗濯したり、汚水を流したりしては、いけない。

イテキ　エウォンネ　イフライパアンペ　ネ　ナ、イテキ　ウェンペ　エウォンネ　イテキ　アオスラプ　ネ　ナ。　itek (k) i　ewonne ihuraypa=an pe ne na, iteki wen pe ewonne iteki a=osurpap ne na.

「川の中で洗濯してはいけない、汚いものを川に捨ててはいけない」と注意される。

カムィ　イルシカ　kamuy iruska　すれば、チェプ　カ　ヘメシパ　ソモ　キ　cep ka hemespa somo ki「神が怒れば、魚も上がってこない」

〔白沢ナベ氏〕

6－4－7．呪術（トゥス）

私の弟は一度ひどく頭が痛くなったことがある。小山田直美氏の母はトゥス　tusu　する人だったので、見てもらいに行った。ネプカ　アカル　シリ　カトゥ　ウェン　ソモ　キ　ヤ　nep ka a=kar sir katu wen somo ki ya？「何か、私の行いが悪かったのでしょうか」と言って、そのトゥスするおばさんにお願いしたら、ハィ　クサパ、　ハィ　クサパ　hay ku=sapa、hay ku=sapa「頭が痛い、頭が痛い」と言ってムジナ（モユク　moyuk）の頭にウジがたかっていることを教えた。そこで以前捕って祭ったムジナの頭を見てみると、脳味噌がきれいに取り除かれておらず、ウジがたかっていた。きれいに掃除をし直し、ムジナの神に「私が悪かった」と謝った。すると頭の痛いのがすっかり直った。

巫術が始まる前、おばさんの首にイナウを付け、付添いのおじいさんがカムィノミ　kamuy nomi　をした。

〔小田イト氏〕

6－5．人の一生

6－5－1．結婚

結婚に関連する単語を挙げる。

ウコル　ukor　結婚する

ウトムヌカル　utomnukar　結婚させる

ココゥ　kokow　またはココウェ　kokowe　婿

コシマッ　kosmat　または　コシマチ　kosmaci　嫁

ウムレックル　umurekkur　夫婦

アシル　ウムレックル　asir umurekkur　新婚夫婦

〔白沢ナベ氏〕

私は、アィヌプリ　aynu puri（アイヌ風）の結婚式を見たことがない。

〔小田イト氏〕

6－5－2．出産

ホンコル　ワ　アン　hon=kor wa an「妊娠している」。ヌワプ　nuwap　お産する（うなること）。ヌワプ　エシン　ニゥケシ　nuwap esin niwkes「子どもを産めない」（お産が重くて）」。

ヌワプ　エトコィキ　コラン　nuwap etokoyki kor an「お産のしたくをしている」

〔白沢ナベ氏〕

妊婦は左座の下手（エウトゥンネ　eutunne）の火のそばに寝かせる。お産がすんだらすこし上の方に移動させる。

〔小田イト氏〕

ポン　アペ　pon ape　という火を炉に別にたいて、そこでおかゆ（サヨ　sayo）をたいて産婦に食べさせる。3週間位は産婦は大事にする。別に火をたくのは「大きなフチ　húci（アペフチ　apehúci　火の神）」に失礼だからだろう。お産する時、旦那さんがいたら産む人と、いたら産まない人といる。エカシが、無事に産まれるようにとお祈りするから、男の人がいないということはない。火の神様にお祈りする。タネ　ヌワプ　コル　アン　tane nuwap kor an「いまお産の最中だ」。

〔小田イト氏〕

お産のとき、火の神にいのる。難産のとき、悪魔のいたずらか、という時は、ソコニ　sokoni「ニワトコ」の枝でフスソ　フスソ　husso husso　と払う。スルククスリ　surkukusuri「ショウブ」をふきかける。おばあさんでもおねえさんでもだれでもやる。

〔白沢ナベ氏〕

ござを編むキナを何本か湿らせて、妊婦のおなかにしめさせる。そしてその帯を切る。あんまりお産の重い人にはそうする。

〔小田イト氏〕

お産がかるくなるよう、妊婦にイナゥ　inaw　をつける。手伝いの近所の女の人にもご苦労さん、という意味で、火の神様にお祈りをしてから首にかけてやる。

〔小田イト氏〕

妊娠した人はカィクマ　kaykuma「細柴」をひざで折るのもだめ。腹にひびくから。枯れ枝を手を伸ばして折るのもだめ。

〔白沢ナベ氏〕

ネウン　ネ　コルカ　ピルカ　ティネシ　ヤィコサンケ　neun ne korka pirka teynesi yaykosanke「どうにか良い子が無事産まれた」

〔小田イト氏〕

産湯を使うは、ティネシ　ア　フライェ　teynesi a=huraye　という（小田イト氏）。子どもが生まれたら、トゥナシ　ウセィ　カラン　カラン　túnas úsey kar (y)an kar (y)an「早くお湯をわかせわかせ」と騒ぐ。トゥナシ　ウセィ　アッテ　ヤン　túnas úsey atte yan　ともいう。お湯は大鍋でわかす（白沢ナベ氏）。産婦のうしろの方で赤ん坊を洗う。産婦も頭おさえるくらい手伝える。

〔小田イト氏〕

産婆は、女の子が生まれると、オヤシケ　ネ　ワ　oyaske ne wa（oyaske「割れ目」）「女の

子だよ」という。男の子なら、オクカヨ　ネ　ワ　okkayo ne wa　という。日高の人から聞いたヤィサマに「ヤィサマ　サマムペ　シプポ　サクノ　エネレ　サポ　yaysama samampe sippo sakno en=ere sapo（ヤィサマ、カレイを塩をつけずに食べさす姉さん）おやかわいいね、おやめんこいね」というのがある。日高の方では、女の性器をサマムペ　samampe　というが、こちらでは、言わない。　〔小田イト氏〕

ハンク　アトゥ（フ）　hanku atu (hu)「へその緒」。へその緒は大人になってもとっておく。

〔白沢ナベ氏〕

おっぱいは生まれた次の朝まで飲ませない人もある。下の子が生まれると、乳にアク（灰）をつけたり、鍋炭をつけて、上の子にイチャクケレ　イチャクケレ　icakkere icakkere「汚い、汚い」と言って恐がらせて（シトマレ　sitomere）飲ませないようにする。乳が余ると茶碗に半分くらい搾って、トット　ハクカ　ネーナ、ク　ワ　エンコレ　totto hokka ne na, ku wa en=kore「母の水だ。飲みなさい」と言われた。トットは、親のことだから、親の水だから飲め飲めと言われたのだろう（小田イト氏）。普通の水でも大人は、ワクカ　wakka　というのを子どもは、ハクカという。

〔白沢ナベ氏〕

子どもが生まれた後、薬として、ハンノキの内側の皮（ケネ　カプ　kene kapu）をせんじて飲ませる。赤い色になる。これは染物にも使う。

生まれて一週間位したら、くるんでいた布を取って赤ん坊に着物を着せて、産婦も床上げする（小田イト氏）。床上げのことは、タネ　ソッキヒ　ア　チュプ　tane sotkihi a=cúpu　という。ソッキ　sotki　は寝床のこと。タネ　ソッキヒ　アチュプ　ヤクカ　ピリカ　tane sotkihi a=cúpu yakka pirka　という話になるらしい。

〔白沢ナベ氏〕

子供を産んでからの会話の例。

ヘンパラ　エポコル　henpara e=pokor「いつあんた子ども産んだの」

テータ　ネ　ア　ワ　téta ne a wa「こないだだよ」8月31日に　クポコル　ワ　ku=pokor wa「8月31日に産んだ」

タンパ　へ　tanpa he？「今年かい」

タンパ　tanpa.「今年だ」

タンパ　へ　ネ　ポコリ　アン　クル　カ　エラムスカリ　tanpa he ne pokori an kur ka eramuskari「この年で子ども産んだ人も知らない」。ヘンパラ　エポコル　ア　ルウェ　アン。ケラムシカリノ　カン　henpara e=pokor a ruwe an. k=eramuskarino k=an「いつあんた子ども産んだの、私知らずにいた」

〔白沢ナベ氏、小田イト氏〕

6－5－3．育児

子供を育てることをポレシカ　po=reska　とかポレス po=resu　と言う。

〔白沢ナベ氏〕

生まれて一週間くらいは大きい湯上がりタオルくらいな大きさのきれ（名前は特になし。言えば　ティネシ　ア　コカリ　フトン　teynesi a=kokari huton　か。）で、産湯を使わせてから体をふいて、巻いておく。そのあとは手足のついた着物を着せる。おしめもさせる。おしめのアイヌ語は、しらない。おしめと言っていた。おっぱいをのませることは　ティネシ　トノンテ　teynesi tononte　という。カプ　エレ　kap ere はまだおっぱいが出ていない時に言うこと。

〔小田イト氏〕

おっぱいを飲ませるは、カプ　エレ　kap ere, カプ　ヌンヌンテ　kap nunnunte　という。ためしに吸わせてみること（トーペ　ヌンパ　ワ　インカラ　tópe nunpa wa inkar　という。

〔白沢ナベ氏〕

シキル　カ　エアシカィ　sikiru ka easkay「(赤ん坊が) 寝返りをうつようになる」と喜んでいるのを聞いたことがある。

〔白沢ナベ氏〕

ティネシ　タネ　レイェ　teynesi　tane　reye「赤ん坊がいまはって歩く」。レイェレイェ reyereye「はう」。

〔小田イト氏〕

私は、赤ん坊は、シンタ　sinta「ゆりかご」に寝かせて、うごいても、エシルピチ　ワ　ハーチリ　esirpici wa hácir（頭がガクンとなって倒れる）ないようにひもで足までしばり、ポプケノ　ホッケレ　popkeno hotkere（あったかく寝かせる）する（小田イト氏)。シンタは、つるつるしたよい木でつくる。頭が高く、足が低くなるように作る。横木は4本つける。横木は、そんなにおしりまでひかない。その上にカトゥンキ　katunki で編んだチタルペ　citarpe、ヤットゥィ　yattuy　をひく。

子どもをしばる時は、3回くらいなわをまわす。手もうごかせない。シンタは、四隅（縛る所が出っぱっている）になわをつけて、上からさげた鈎につるす。子どもをしばる縄はジグザグにまわして、子どもをぐるぐるまきにする。ぶらさげる縄は子どもの顔にかからないように長めにする(小田イト氏)。シンタは右座の方につるす。おくさんはそばに座って、シンタスイェ　sintasuye（ゆりかごをゆらす）したり、泣いたら乳飲ませたり、仕事したりする（モコルトット　ランラン　イテキ　チシノ　ハムキ　mokor totto ran ran iteki cisno hámuki（小田イト氏)。

一日三回くらいシンタからはずしておしめをかえたりする。夕方になるとシンタからはずす。家の人がみんな抱くから。私はシンタに三才くらいまで子どもを入れた。私はふ化場ではたらいていたから、朝、乳を飲ませて、おしめかえて、仕事に出て、昼前に戻って、乳飲ませて、おしめかえて、反対側に頭をむけて寝かせてまたしばりつけて、三時頃また帰って来て面倒をみる、というふうだった。

〔白沢ナベ氏〕

ホ　ホ　ルルルル　ホ　ホ　ホ、ホ　ホ　ルルルル　ホ　ホ　ホ、ホ　ホ　ルルルル　ホ　ホ　ホ　ho ho rrrr ho ho ho,ho ho rrrr ho ho ho,ho ho rrrr ho ho ho　という声を出してあやすと子どもはすぐ眠るから、また仕事に行ったものだった。このような声をイヨンルィカ　iyonruykaという。言葉をいれて言う子守歌もイヨンルィカという。

〔白沢ナベ氏〕

キシマ　kisma　だっこ。マカナク　ティネシ　アキシマ　プ　ネ　ワ　makanak teynesi a=kisma p ne wa？「どうやって赤ん坊抱くの」。ティネシ　カィ　teynesi kay（おぶれ）。ティネシ　クカィ　teynesi ku=kay（私は赤ん坊をおんぶする）。

〔白沢ナベ氏〕

おばあさんが孫を、棒の先に荷縄（タル　tar）をつけて、そこに子どもを腰掛けさせておんぶしていたのは見た。あたまに荷縄をかけていた。私の母はモウル　mourを着ていたが、自分達の世代は着なかった。

〔小田イト氏〕

人にはだをみせるものではないということは厳しく言われたが、おっぱいをやるときに厳しくいわれたことはない。

〔白沢ナベ氏〕

子どもがうまれても育たない人は、子どもの育つ家からきれをもらって歩いて、子どもに運のいい人にぬって着物にしてもらって、着せる。よせあつめの着物だ。

〔小山田ハヤ子氏〕

子どもは普通の着物をきていた。夏ならはだし、冬はチェプケリ　cepk keri、プタケリ　puta keri　をはいた。

〔小田イト氏〕

子ども連れてあまりよそには行かない。

こどもが大人の話を聞いてべらべらしゃべりまくると、喧嘩のもとになるから、と言って、私の母はなかなか聞かせてくれなかった。しかし、年寄りがどこからかくると、ape tomotuye「炉ごしに」のぞきこんで、年寄りの話を聞いた。

〔白沢ナベ氏〕

6－5－4．命名

名前は生まれて2、3週間でつける。私の長男は息が止まって生まれたので、年寄りが、くるんで後ろにおいたほうがいい、とこそこそ話をしている。そうしたら、チタ姉（人名、小山田夫人の曾祖母）が、そんなこといわないで、ふところでぬくくして、口の糊、鼻の穴も吸いぬけといった。そうして私の母がふところにあかんぼうを入れてそうしたら、ウワアと大きな声で10分くらいで泣きだした。そうしたら1週間たったかたたないうちに、私の父が、ホシピレクル　hosipirekur　ってつけるべ、と言った。しかし、アイヌ名は、大正生まれの人に二つ

名をつけるのもどうかと思ってつけなかった。

〔白沢ナベ氏〕

わたしの父はサンレキ　sanreki　という名。息がきれて生まれたからそうつけたのではないか。私の父は5人兄弟だが、その名前は（早稲田の）田村先生が書いてもってきてくれたからおかげであるよ。子どもの名は親がつけるとはかぎらない。

〔白沢ナベ氏〕

だいぶ大きくなってから名前を付けたようだ。なまえは　レーヘ　rḗhe　という。

私の母は明治17年、しゅうとは16年だが、日本人の名前を付けて役所にとどけたようだ。2つ名を持つ人もいた。しゅうとじいさんは アサレックル　asarekkur　という名だった。朝早くから目が醒めて、早くおきたくて泣いていたので、そうついたらしい。私の夫は喜代作だが、名前が良すぎて弱いと困るということで、喜代作から豊作に改名された。しかし、役場のせいで、喜代作のままになった。

カムィオロイタク　kamuy'oro'itak　は神様にお祈りすること。

〔小田イト氏〕

6－5－6．葬礼

「死ぬ」という言葉はライ　ray　と言うが、この言葉は余り使わない。（チコル　セタ　ライ ci=kor seta ray「うちの犬が死んだ」〔小田イト氏〕）。イサム　isam「なくなる」とかオンネ onne　「年をとる」とかモコル　mokor「寝る」という言葉を使う。エシッチゥ　esitciw　というのは「つまずく」とか「のめる」という意味で、「死ぬ」というときには使わない。オンネワ　イサム　onne wa isam「年をとって死ぬ」、ピリカオンネ　pirka=onne「楽な死に方をする」（クコル　エカシ　ピリカオンネ　ルウェ　ネ　ku=kor ekasi pirka=onne ruwe ne「私の祖父は大往生をとげた」、クコル　エカシ　ピリカオンネ　キ　ワ　イサム　ku=kor ekasi pirka =onne ki wa isam「（同上）」、ピリカオンネ、エラヤプカ　pirka=onne、erayapka「大往生だ、偉くいいことだ！」、チコル　セタ　モコル　ci=kor seta mokor「うちの犬が死んだ」

〔白沢ナベ氏〕

おばあさんが亡くなったら、小さな家を建てて、中に縄を張り（カケンチャ　kakenca）その上におばあさんが日頃着ていた着物、晴れ着をすべて掛け、みんな焼いてしまう。

〔小山田直美氏〕

葬式の時にも「先に行っている父母の所に行けるように」と火の神（アペフチ　apehuci）にお願いする。

〔小田イト氏〕

猟に出かけている時に、家のゴミを捨てると神様が嫌って猟に影響するが、逆に葬式の時には、ほうきでゴミをはきだす。家の外まで悪いものを追い出すということだ。

〔白沢ナベ氏〕

人が死んだらソコンニ　sokonni　で、その家に入る前にお払いをする。

〔白沢ナベ氏〕

死んだ人に付ける手甲や脚半（ホシ　hos）に刺繍がしてあるのを見たことがある。

〔白沢ナベ氏〕

誰かのうちに不幸があったら、親たちは葬式の手伝いに行き、子供たちは留守番する。親たちは子供たちにオコクコ　エキラ　okokko ekira「オコクコ（おばけ？）が（人を連れて）逃げて行った」と言っておどかし、外に出さないようにした。

〔小田イト氏〕

6－6．動作・仕草

昔の人はお酒をこしらえてカムィノミ　kamuynomi（お祈り）するとかイチャルパ　icarpa（先祖供養）するときだけ集まる。いいかげん年いった大人は、お客に来ると、家の前で足音をたてたり、男なら、「エフン、エエエエエ」と咳ばらいしたりする。すると、家の中のばあさんはのぞいて、旦那に、アフンケ　チキ　エ　ピルカ、ソモ　チキ　エ　ピルカ　ahunke ci=ki e =pirka, somo ci=ki e=pirka「入れて良いか悪いか」と尋ねる。すると、旦那はアフプ　ルスィ　クス　パイェ　カ　ウタル　ネ　ワ　クス　チセ　タ　アリキ　ハウェ　ネプ　アフンケ　ahup rusuy kusu paye ka utar ne wa kusu cise soy ta arki hawe ne p, ahunke.「入りたいから来た人達だから家の外に来ているのだから入れろ」と言う。するとばあさんは戸を開けて、アフプ　ワ　シニ　ヤン　ahup wa sini yan「入って休め」という。そうしないと、いくら人がいることがわかっていても、戸を開けることが出来ないものだと言う。勝手に開けると、イクカ　ikka「どろぼう」に来たか、と怒られるだろう。冬、テシマ　tasma「かんじき」をはいていれば、家の前で　ウウェキクキク　uwekikkik「たたきあわせる」してバンバン音を出して、来ていることを知らせる。　〔白沢ナベ氏〕

女も他家を訪問するときは家の前で軽い咳払いをする。ネン　カ　エク　ノィネ　ハワシ（フマシ）ナ　nen ka ek noyne hawas（または　humas）na「誰かきたようだ」という。

〔小田イト氏〕

シケトクナワ　ア　エラムシカリ　ポロ　スクプ　クル　ポロ　スクプ　クル　イタク　ハワシ　ハウェ　エネ　アニ。アフプ　ルスィ　クス　アルキ　ウタル　ネヤクン　アフンケ　トゥナシノ　siketoknawa a=eramuskari poro sukup kur poro sukup kur itak hawas hawe ene ani. ahup rusuy kusu arki utar ne yakun ahunke tunasno.（見たことのない老夫婦が来た。入いりたくている人たちなら入れなさい。早く）というと、ソーカル　sokar（席を作る）したり、ムンヌウェ　munnuwe（掃く）したりと言う言葉もある。

〔白沢ナベ氏〕

子ども、女がお客の場合、あんまり憐れにみえるものは迎えに出て、手をつないではいると言う。テケヘ　アニ　アフン　tekehe ani ahun「手をもって入る」。男が迎えに出て悪いと言うこともないだろうが、やっぱり、女がいるから女の仕事にしておくんだろう。

〔白沢ナベ氏〕

相手を馬鹿にするときのしぐさにエノックシ　enotkus　とか、エノッタララ　enottarara　というのがある。これは、顎を高く反らせる仕草だ。

〔白沢ナベ氏〕

6－7　交易・通婚・戦争

千歳の人々は、平取、穂別、白老、幌別から嫁いだり、婿に来る人が多い。穂別の森本氏は、自分は、千歳がルーツだと言っていた。

〔小山田直美氏〕